

大阪・奈良の方言における 否定辞について

——世代差を中心に——

村 中 淑 子

1 はじめに

日本語の方言における否定辞¹⁾を全国レベルで見れば、おおよそ東日本にはナイの類（ネー等を含む）、西日本にはンの類（ヘン等を含む）が分布している。

西日本方言の代表的存在とも言える大阪方言において、否定辞といえはンあるいはヘンであろう（「食べん」「食べへん」等）。ところが2009年に大阪南部の和泉市にある本学へ赴任して以来、学生から「食べやん」「できやん」といった否定形式をしばしば耳にする。本学には和歌山県から通う学生も一定数いることから、その影響で否定辞ヤンをよく聞くのかとも考えたが、大阪市内から通う学生も使っているようであり、実態を調査する必要があると考えられた。大阪では従来、否定文の末尾にヤンが使われることはあまりなかったと思われるのである（2章参照）。

ところで否定辞は、文末部に位置して文を否定文にするのに使われるだけでなく、文の途中に位置する場合がある。すなわち、仮定、意志、義務

キーワード：否定表現，ヤン，ン，大阪方言，関西方言

などに否定辞が埋め込まれることがあるが（「～なくても」「～ないでおこう」「～なければならぬ」）、それらを合わせて調査することにより、否定表現の実態を知るだけでなく、その変化の要因の一端を探ることが可能と予測し、質問調査票を作成した。

本稿では、大阪・奈良の方言話者を対象におこなったごく小規模な調査の結果をまとめた。ここで結論を先取りして述べると、世代差の結果から、否定辞ヘンの減少、および、シの増加とヤンの台頭が確認された。否定文におけるヤンの出現については、否定仮定表現（～ヤンデモの形）・否定意志表現（～ヤントクの形）の関与と、義務表現（～ヤナアカン）の非関与が示唆された（表14）。また方言区域ごとのヤンの出現を点数化した結果、同じ大阪府内でも泉北および南河内で変化が進んでいると考えられた（表15）。

2 先行研究

大阪方言における主な否定辞ガンとヘンであることは、前田勇（1955）「大阪方言における動詞打消法」、山本俊治（1962）「大阪府方言」、山本俊治（1981）「シ」・「ヘン」をめぐって——大阪方言における否定法——等に述べられている通りである。近年の研究を見ても、高木千恵（2004）「若年層関西方言の否定辞に見る言語変化のタイプ」は、若年層関西方言の否定辞について詳細に論じたものであるが、シ・ヘン・ナイを対象としており、後述の通り、用いられた談話資料にヤンはほとんど出現していない。

否定辞ヤンが和歌山で使われていることは、楳垣実（1936）「「へん」と「やん」——和歌山方言の否定の助動詞——」にある通りである。また、全国規模の方言調査結果である国立国語研究所『方言文法全国地図』（1979～1982年調査）をみると、第2集72図「起きない」の方言形として、オキヤ

大阪・奈良の方言における否定辞について

ンが和歌山県北部から奈良県・三重県にかけて分布しているのがわかる。同集74図のミヤン（見ない）、79図のネヤン（寝ない）においても同様の分布がある。

一方、大阪では従来、否定辞のヤンはあまり使われていなかったとみてよいだろう。すなわち、上で述べた『方言文法全国地図』第2集72図のオキヤン（起きない）、74図のミヤン（見ない）、79図ネヤン（寝ない）は、いずれも大阪府内（6地点）には見当たらないのである。ただし、他の調査では、大阪府内にも否定辞ヤンがわずかには見られる。たとえば岸江信介・中井精一・鳥谷善史（2001）『大阪府言語地図』（1990～1992調査）では、ミヤン（見ない）が泉南市と四条畷市に一例ずつあり、ヨーキヤン（着ることができない（能力不可能））が泉南部に3例と中央から南部にかけて3例みられる。岸江・中井（1999）『大阪～和歌山間方言グロットグラム』（1992～1996年調査）では大阪府泉南市と阪南市に否定辞ヤンがみられ、摂河泉地域史研究会（1994）「泉南市山間部言語調査報告」（1993年調査）でも、泉南市の否定表現にヤンの存在が報告されている。

さらに、否定文の文末ではなく、仮定や意志などに否定辞ヤンが埋め込まれた形の使用については、次のデータがある。『大阪府言語地図』の「しなくても（いい）」という項目でシャンデモ・シヤンカテが富田林市・太子町・守口市・門真市にある。先にふれた高木（2004）は、1972～1977年生まれの70人分の談話資料を用いたものであるが、その中に否定辞ヤンが2例だけ出現したとあり、それは「コヤンデエエ（来なくていい）」「シヤンデモ（しなくても）」であった。また、鏑木昌博（1995）は大阪府中央部出身1928年生まれの女性話者の使うさまざまな否定の表現を音調とともに示したものであるが、ヤンを含む表現は「デヤントコ（出ないでおう）」のみである。

そのほか、具体的な調査結果ではないが、大阪方言についての記述で否

定辞ヤンに触れたものとして郡史郎（1997）がある。ネヤン（寝ない）・ミヤン（見ない）等をネヤヘン・ミヤヘン等とまとめて「「ヤ」をはさむ言い方」とし、「特に2拍の動詞でかなり有力で、他の否定表現と併用されている」と述べている。

以上をまとめると、大阪方言において、基本的な否定辞はンとヘンであり、ヤンはあまり使われていなかった。ただし同じヤンでも、否定文の文末のヤンに比べると仮定や意志に埋め込まれたヤンはいくらか使用頻度が高かったとみられる。

そして、ごくさいきんの大阪で否定辞ヤンが増えていることについて、専門の見地から述べたものは、管見によれば次の2つである。

一つは鳥谷善史・岸江信介（2014）で、2011年から2014年にかけての大規模な調査（数百人レベルの大阪あるいは近畿における調査、および千人レベルの近畿・四国・中国等の方言調査、さらに膨大な量のツイッターデータの地図化）の結果として、大阪方言における否定文のヤンの増加が明らかにされており、高年層世代から受け継がれたものではなく、三重県・和歌山県から大阪へ流入した結果、大阪の若年層が新たに使うようになったものと説明されている。

もう一つは日高水穂（2013）で、近畿地方出身者における調査結果として大阪の若年層回答者の約半数がコヤン（来ない）を「よく言う」と答えており（2012年調査）、また大阪話者の3割近くがミヤン（見ない）・ネヤン（寝ない）を回答している（2013年調査）。

大阪におけるヤンの増加はおそらくここ10年以内に起きたごく新しい現象なのだろう。

この大阪における「～ヤン」増加の要因については、明らかでない。鳥谷・岸江（2014）で「ミヤナアカン、ミヤントアカン、ミヤントコ、ミヤントイタラなどの形式がいち早く近畿中央部で定着し、これらが引き金と

大阪・奈良の方言における否定辞について

なって言い切り形も定着したとみることができよう」と説明されているが、その根拠となる具体的な資料は明示されていないようである。また、このほかには、否定文のヤンと、ヤン否定を含んだ意志表現・仮定表現との関係について、明示的に述べた研究は見当たらなかった。

3 調査概要

調査時期：2011年7月～9月。

調査対象：桃山学院大学の学生およびその家族。若年層44名と中高年層18名、計62名²⁾。回答者の在住地域の内訳については表1を参照。

調査方法：方言に関する質問を載せた調査票を配布し、質問への回答（使用語形）を複数の選択肢から選んでもらう方式。調査票の文言は本稿末尾に掲載した。学生（2・3・4年生）に対しては7月に大学で調査を実施し、その場で質問なども受け付けながら記入してもらった³⁾。その後、3・4年生の演習学生を通じてその家族に調査を実施した。

調査項目：否定辞に関係する次の9項目。①五段動詞・単純否定・現在「行かない」、②可能動詞・否定・現在「行けない」、③五段動詞・単純否定・過去「行かなかった」、④可能動詞・否定・過去「行けなかった」、⑤一段動詞・単純否定・現在「着ない」、⑥一段動詞・可能否定・現在「着られない」、⑦一段動詞・否定の仮定「着なくても」、⑧一段動詞・否定意志「着ないでおこう」、⑨一段動詞・義務「着なければならない」。

表1における大阪府内の地域区分は、山本俊治（1962）に従っている⁴⁾。実際の回答者の言語形成期在住地域⁵⁾は、「大阪1＝摂津方言地域」は大阪市内、「大阪2＝北・中河内方言地域」は寝屋川市、東大阪市、八尾市、「大阪3＝南河内方言地域」は柏原市、松原市、南河内郡、「大阪4＝泉北方言地域」は堺市、高石市、泉大津市、「大阪5＝泉南方言地域」は岸和田市、貝塚市であった。

表1 回答者の言語形成期在住地域

地域区分	若年層			中高年層			総計
	女	男	計	女	男	計	
大阪1(大阪市)	10	4	14	3	2	5	19
大阪2(北・中河内)	2	4	6	3	1	4	10
大阪3(南河内)	2	1	3	0	1	1	4
大阪4(泉北)	6	4	10	2	1	3	13
大阪5(泉南)	3	1	4	0	0	0	4
奈良(北部)	6	1	7	3	2	5	12
総計	29	15	44	11	7	18	62

奈良の回答者の在住地域は天理市、生駒市、生駒郡斑鳩町、奈良市、香芝市、大和高田市、宇陀市であったので、奈良県北部として1グループにまとめた。

若年層はほとんどが大学生で1988～1992年生まれであるが(調査当時19～23歳)、1984年生まれ女性と1980年生まれ男性が1名ずつ含まれている。中高年層は1949～1966年生まれである(調査当時45～62歳)。

4 項目ごとの調査結果と考察

本章では、9つの項目ひとつひとつについて、世代別の語形集計表を示しながら説明を加えていく(次の5章で、項目を通した集計や項目どうしの関係から、否定辞ヤンについての解釈を行う)。

まず、五段動詞・単純否定・現在「行かない」について、若年層44名・中高年層18名の回答を、そのままの形で集計したのが表2である。これは併用回答の様相を示している。

表2の左の欄の語形は、回答者の選択したものをそのままの順番で示している。たとえば、上から2番目の「イカン、イカヘン」の部分は、イカンを第1回答とし、イカヘンを第2回答とした回答者が大阪の若年層に1

大阪・奈良の方言における否定辞について

表2 「行かない」についての回答語形

行かない	若年層			中高年層			総計
	大阪	奈良	小計	大阪	奈良	小計	
イカン	14	2	16	1	0	1	17
イカン, イカヘン	1	2	3	0	0	0	3
イカン, イカヘン, イケヘン	2	0	2	0	0	0	2
イカン, イケヘン	1	0	1	0	0	0	1
イカヘン	11	3	14	4	5	9	23
イカヘン, イカン	1	0	1	0	0	0	1
イカヘン, イカン, イケヘン	1	0	1	0	0	0	1
イカヘン, イケヘン	1	0	1	0	0	0	1
イケヘン	3	0	3	5	0	5	8
イケヘン, イカン, イカヘン	1	0	1	0	0	0	1
イケヘン, イカヘン	0	0	0	1	0	1	1
イケヘン, イカン	0	0	0	2	0	2	2
イカナイ	1	0	1	0	0	0	1
総計	37	7	44	13	5	18	62

名、奈良の若年層に2名いたことを示し、上から6番目の部分は逆にイカヘンを第1回答とし、イカンを第2回答とした回答者が大阪の若年層に1名いたことを示す。この「行かない」項目においては表2の通り、複数回答を行った回答者が若年層44人中10人、中高年層18人中3人いた。他の項目を見ると、同様の複数回答者がそれぞれ若年層に4～9人、中高年層に0～4人いた。

しかしこのような形の表は煩雑で見にくく、結果が把握しにくい。傾向をみるためには延べ数の表でよいと考えられるので、この後はすべて回答語形の延べ数の表を示し、必要に応じて複数回答についての説明も行うこととする。したがって、このあとの表3～表11における総計は人数ではなく、回答数の合計となる。以下、調査への延べ回答数を、若年層・中高年

表3 「行かない」についての回答語形数（延べ）

①行かない	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
イカン	21	4	3	0	28
イカヘン	18	5	5	5	33
イケヘン	9	0	8	0	17
イカナイ	1	0	0	0	1
総計	49	9	16	5	79

（表3は表2と同じ結果を回答の延べ数で示したものである）

層の世代別、および大阪・奈良の地域別で示していく。

「行かない」については表3をみると、大阪では、中高年層では①イケヘン②イカヘン③イカンの順で多かったものが、若年層では①イカン②イカヘン③イケヘンの順になっている。数が少ないので即断はできないが、単純否定における大阪の伝統的語形ともいえるイケヘン（五段動詞における語幹末のエ段音＋ヘンの形）が衰えつつあり、イカン（ンに接続する形）、および京都市的な語形ともいえるイカヘン（五段動詞における語幹末のア段音＋ヘンの形）が優勢になっていることがわかる。

奈良でも同様に、ンに接続する形が若年層に多くなっている。

「行けない」については表4をみると、大阪では、中高年層・若年層ともに①イカレヘンの形が最も多い。注目されるのは、イケヤンの形である。大阪の中高年層ではゼロであるが、若年層には新しく生じてきている。また、イケンの形も若年層にのみ現れている。可能動詞否定現在形の大阪タイプはイカレヘン、京都タイプはイケヘンであると考えると、この項目に関しては、大阪地域における京都語形の採用は起きていない。

奈良では、イカレヘンからイケヘンへの移行がみられる。

「行かなかった」については表5をみると、大阪では、中高年層ではイカンカッタ・イカヘンカッタ・イケヘンカッタが拮抗しているが、若年層

大阪・奈良の方言における否定辞について

表4 「行けない」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
②行けない					
イカレヘン	30	1	12	3	46
イケン	5	1	0	0	6
イケヘン	0	5	2	2	9
イケヤン	6	1	0	0	7
イケレヘン	2	0	1	0	3
イケレン	2	0	0	0	2
ムリ	1	0	0	0	1
総計	46	8	15	5	74

表5 「行かなかった」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
③行かなかった					
イカンカット	25	4	6	1	36
イカヘンカット	8	1	6	3	18
イケヘンカット	9	0	5	1	15
イカナンダ	1	0	0	0	1
イカヘンダ	1	1	0	0	2
イッテナカット	1	0	0	0	1
イッテヘン	2	1	0	0	3
イッテナイ	2	0	2	0	4
総計	49	7	19	5	80

では①イカンカットが圧倒的に多く、イケヘンカットとイカヘンカットは少ないがほぼ同数で続く。

奈良でも、イカヘンカットからイカンカットへの移行が見られる。

なお、イッテヘンやイッテナイという回答については、選択肢として示したのではなく、「その他」の回答欄に記入されたものである。質問の

趣旨は過去形を尋ねることであったが、過去の出来事について現在の視点から答えられたものであろう。

表6 「行けなかった」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高齢層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
④行けなかった					
イカレヘンカッタ	28	1	12	5	46
イケンカッタ	8	1	1	0	10
イケヘンカッタ	2	3	2	0	7
イケヤンカッタ	7	1	1	0	9
イケレヘンカッタ	1	0	0	0	1
イカレンカッタ	0	1	0	0	1
イッテナイ	0	1	0	0	1
イカンカッタ	0	0	1	0	1
総計	46	8	17	5	76

「行けなかった」については表6をみると、大阪では中高齢層・若年層ともに①イカレヘンカッタの形が最も多い。とくに中高齢層はほぼ全員がイカレヘンカッタを回答している。若年層にはイケヤンカッタの形が生じている。またイケンカッタもある。可能動詞否定過去形におけるこのような状況は、可能動詞否定現在形にイケヤン、イケンが生じていることと関係が深いと考えられる。

奈良では、イカレヘンカッタからイケヘンカッタへの移行がみられる。これも可能動詞否定現在形におけるイカレヘンからイケヘンへの移行と並行的な現象であろう。

「着ない」については表7をみると、大阪・奈良とも、中高齢層、若年層ともに①キーヒンが最も多い。キーヘンも少しあるが、キヤンが若年層に生じていることが注目される。なお、キランは岸和田の若年層女性の回答であるが、この回答者はこの後の項目でもキランデモ・キラントコ・キ

大阪・奈良の方言における否定辞について

表7 「着ない」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
⑤着ない					
キーヒン	22	4	9	2	37
キーヘン	6	3	2	0	11
キヤン	9	4	1	0	14
キヤヘン	2	0	1	2	5
キン	1	0	1	0	2
キラン	1	0	0	0	1
ケーヘン	1	0	1	0	2
キヤイン	0	0	1	0	1
キエヘン	0	0	0	1	1
キナイ	0	0	1	0	1
総計	42	11	17	5	75

表8 「着られない」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
⑥着られない					
キラレヘン	33	2	11	5	51
キレン	3	1	2	0	6
キレヤン	3	1	0	0	4
キラレヤン	0	0	1	0	1
キラレン	1	1	1	0	3
キレヘン	0	3	0	0	3
キーヒン	0	0	1	0	1
総計	40	8	16	5	69

ラナアカンという語形を記入しており、一段動詞「着る」の五段化が起きているものと考えられる。

「着られない」については表8をみると、大阪では、中高年層・若年層

ともに①キラレヘンが最も多い。キレン・キラレンも少しあるが、割合から考えれば、若年層に向けて減っているといっていよう。また、若年層にキレヤンが生じている。

奈良では、中高年層はキラレヘンにまとまっているが、若年層はばらついており、①キレヘン②キラレヘンの順になっている。

表9 「着なくても」についての回答語形数（延べ）

年代	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
⑦着なくても					
キンデモ	17	1	8	3	29
キヤンデモ	18	5	4	1	28
キヤンクテモ	2	0	0	0	2
キンクテモ	2	0	0	0	2
キンクテ	1	0	0	0	1
キーヒンクテモ	1	0	0	0	1
キーヘンクテモ	0	1	0	0	1
キヤヘンデモ	1	0	0	1	2
キーヒンデモ	0	0	1	0	1
ケーヘンデモ	0	0	1	0	1
キランデモ	1	0	0	0	1
キンカテ	0	0	1	0	1
総計	43	7	15	5	70

「着なくても」は表9をみると、中高年層は①キンデモが多く、それにつく語形として②キヤンデモがみられるが、若年層では逆転して①キヤンデモ②キンデモの順となっている。

この項目は今回の調査項目9つの中で最もバリエーションが多い。これは若年層に「～クテモ」のバリエーションが多く見られたことによる（キヤンクテモ、キンクテモ、キンクテ、キーヒンクテモ、キーヘンクテモ）。これらの語形を答えた7人のうち4人はこれらの形を併用ではなく専用で

大阪・奈良の方言における否定辞について

表10 「着ないでおこう」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
⑧着ないでおこう					
キントコ	15	0	9	3	27
キヤントコ	23	7	4	2	36
キヤヘントコ	1	0	0	0	1
キラントコ	1	0	0	0	1
キンデエエ	1	0	0	0	1
総計	41	7	13	5	66

回答している。

「着ないでおこう」は表10をみると、中高年層では①キントコ②キヤントコの順であるが、若年層では逆転して①キヤントコ②キントコの順に多い（奈良ではそれが極端であり、若年層はキヤントコしかない）。

表11 「着なければならぬ」についての回答語形数（延べ）

	若年層		中高年層		総計
	大阪	奈良	大阪	奈良	
⑨着なければならぬ					
キナアカン	26	3	9	2	40
キヤナアカン	12	3	5	2	22
キヤンナアカン	0	1	0	0	1
キヤントアカン	0	0	1	0	1
キンナアカン	2	0	0	1	3
キーヒントアカン	1	0	0	0	1
キラナアカン	1	0	0	0	1
総計	42	7	15	5	69

「着なければならぬ」は表11をみると、大阪では①キナアカン②キヤナアカンの順で多いが、奈良ではキナアカンとキヤナアカンが同数である。この項目には、中高年層と若年層の目立った違いが見られない。

5 ヘンとンの関係およびヤンの台頭について

4章では項目ごとの状況をみたが、本章では否定辞ン・ヘン・ヤンに注目し、項目どうしの関係や項目を通した集計をみていく。

まず、表12では、大阪における単純否定と可能否定の主な変化の傾向をまとめた。

表12 単純否定と可能否定の変化傾向（大阪）

	単純否定	可能否定（可能動詞否定）
五段動詞・現在	-e・ヘン減少 -ン増加 -a・ヘン増加	-レヘン多い -ン出現 -ヤン出現
五段動詞・過去	-ンカッタ増加	-レヘンカッタ多い -ンカッタ増加 -ヤンカッタ出現
一段動詞現在	-i・ヒン多い -ヤン出現	-レヘン多い -ヤン出現

五段動詞の現在形・過去形は、単純否定・可能否定ともに、否定辞ンが増加している。従来、大阪方言では通常の否定文においてはンよりもヘンのほうが多く使われるようになったと言われていたが⁶⁾、近年では逆に、若年層にンが増えるという現象が起きていることが確認できる⁷⁾。ヘンが高年層にまで十分に広がった結果、逆に若年層にとってはンが古くさいという意識がなくなり、拍数を減少させて表現を軽快にしたい場合にンの形を使うことに抵抗感が無い、ということであろうか。イカンはイカンカッタと、イケンはいケンカッタと、それぞれ連動して増加しているようである。現在形と過去形は、体系的につながりつつ変化するのだと思われる。

可能に関わる形と一段動詞の否定形に、否定辞ヤンが出現している。ヤンとヤンカッタも連動しているようである。

大阪・奈良の方言における否定辞について

表12で省いた奈良では可能否定の状況が少し異なり、－レヘン→e・ヘン、－レヘンカッタ→e・ヘンカッタの変化がみられる。

次の表13では、ヤンに注目し、今回調査の9項目全てにおいて、ヤンが含まれる語形を数えた。「着なければならぬ」は①と②に分けたが、①はヤンの含まれた形である（キヤントアカンとキヤンナアカン）。②はヤンではなくヤの含まれるキヤナアカンの数で、カッコに入れて示した。

表13 9項目におけるヤンの出現数

項目	五段動詞		可能動詞		一段動詞					
	行かない	行かなかった	行けない	行けなかった	着ない	着られない	着なくても	着ないでおこう	着なければならぬ ①(ヤン)	着なければならぬ ②(ヤ)
中高年層 (計18名)	0	0	0	1	1	1	5	6	1	(7)
若年層 (計44名)	0	0	7	8	13	4	25	30	1	(15)
計	0	0	7	9	14	5	30	36	2	(22)

表13から、五段動詞の否定形には現在・過去ともヤンが生じず、ヤンが生じるのは可能動詞もしくは一段動詞であることが確認できる。これは和歌山におけるヤンの使われ方と同様である。また、「行けない、行けなかった、着ない、着られない」の中では「着ない」にヤンが最も多く出現している。すなわち「イケヤン、イケヤンカッタ、キヤン、キレヤン」の中でキヤンが出現しやすいということである。文節の拍数が少ない場合、ヤンの出現が促進される可能性がある、と考えられる。

また、否定現在・否定過去に比べて、否定假定（着なくても）・否定意志（着ないでおこう）にずっと多くヤンが出現している。義務の形（着なければならぬ）におけるヤの出現も若年層回答者の3割以上にのぼる。

そこで、否定假定・否定意志・義務の3項目について、ヤン（もしくは

ヤ)の増減を浮き彫りにするため、次の表14では上位2位の語形に絞って世代差を示した。この3項目においては、4章の表9・10・11からわかる通り、3位以下の語形の頻度数は3以下である(その多くが1)。

表14ではそれぞれの世代において2つの語形のうち多い方をゴシックにした。

表14 否定假定・否定意志・義務の1位・2位の語形

標準語形	方言語形	大阪		奈良		計
		若年層	中高年層	若年層	中高年層	
着なくても	キンデモ	17	8	1	3	29
	キ ヤン デモ	18	4	5	1	28
着ないでおこう	キントコ	15	9	0	3	27
	キ ヤン トコ	23	4	7	2	36
着なければならぬ	キナアカン	26	9	3	2	40
	キ ヤ ナアカン	12	5	3	2	22

表14から、中高年層ではキンデモ・キントコが優勢だが、若年層ではキヤンデモ・キヤントコが優勢になっていることがわかる。つまり、否定假定と否定意志の表現においては、2つの有力な語形のうちの優勢なものが、世代によって入れ替わっている。一方、義務の表現においては、中高年層・若年層ともキナアカンの方が多く(大阪ではほぼ2倍)、優勢語形が世代によって入れ替わっていない。

以上の表13・表14から、可能動詞否定文と一段動詞否定文の文末におけるヤンの出現には、否定假定と否定意志におけるヤン増加という世代差が大きくかかわっている可能性が考えられる。おそらく近年の否定文文末のヤンの増加は、假定や意志に埋め込まれたヤンの増加が先行し、影響を与えたものとみてよいだろう。

次の表15では、方言区域によるヤンの使用割合の違いを示す。

大阪・奈良の方言における否定辞について

表15 ヤンの使用割合（個人点数の地域平均点）

	若年層	中高年層
大阪1(大阪市)	21点/14人= 1.5 {0,1,2,3,4}	2点/5人= 0.4 {0,1,2}
大阪2(北・中河内)	9点/6人= 1.5 {0,2,3,4}	5点/4人= 1.25 {0,2,3}
大阪3(南河内)	9点/3人= 3 {2,3,4}	3点/1人= 3 {3}
大阪4(泉北)	26点/10人= 2.6 {1,2,3,6}	1点/3人= 0.33 … {0,1}
大阪5(泉南)	3点/4人= 0.75 {0,1,2}	0人
奈良(北部)	19点/7人= 2.714 … {1,2,3,6}	3点/5人= 0.6 {0,1}

表の見方を説明する。まず各回答者がヤンを含む語形を一つ回答するごとに1点とし、ヤン使用を点数化した（キヤナアカンは含めていない）。次に個人の点数を足して、方言区域ごとに平均点を出した。{ }の中に示したのは、各方言区域の個人点数である。たとえば、大阪2（北・中河内）に属する若年層回答者は6人いたが、その6人の点数は0, 2, 3, 4, のいずれかであり、合計すると9点で、平均点が1.5点であったということである。

この表15をみると、個人点数の平均（ゴチックの数字）が高いのは南河内・泉北・奈良の若年層である。この3つの地域は、0点の回答者がいなかったという点でも他地域とは一線を画している。ヤンの台頭は大阪南部で起きたことが示唆される。ただし、今回の調査結果をみると、同じ大阪南部でも、泉南はあまりヤン増加が進んでいないようである。その原因としては、泉南には一段動詞五段化があるていど定着していることからヤンが生じにくい可能性があること、などが考えられるが、今後の検討が必要である。⁸⁾

6 おわりに

大阪・奈良の若年層および中高年層を対象として調査をおこなった結果、

五段動詞の現在形・過去形における否定辞ンの増加、および、可能動詞・一段動詞における否定辞ヤンの出現が確認された。全世代に否定辞ヘンが浸透した結果、逆に、若い世代がンを採用しやすくなったのではないかと推測した。また、否定辞ヤンの出現のしやすさには、それを含む文節の拍数の少なさが関係している可能性が示唆された。

否定文におけるヤンの出現については、否定仮定表現（～ヤンデモの形）・否定意志表現（～ヤントクの形）の関与、および、義務表現（～ヤナアカン）の非関与が示唆された。また、方言区域ごとのヤンの出現を点数化した結果、泉北および南河内で変化が進んでいると考えられた。

なお、今回は男女差に注目した分析はしなかった。また、2つの動詞（「行く」「着る」）しか扱っていないが、否定辞ヤンの実態を詳しく知るためには、拍数の多い一段動詞を複数扱うことが必要であろう。また、今回の奈良における調査結果は、人数が少なかったため、参考資料のような扱いとなったが、奈良に焦点をあてた分析も行うべきであろう。いずれも今後の課題としたい。

謝辞

調査に快くご協力下さった方々に感謝いたします。3年前に調査していたものをまとめるのが遅くなったことをお詫びします。

注

- 1) ヤンは語源的には否定辞の名がふさわしくない可能性もあるが、現時点では、動詞に接続して否定の意味を持つ付属形式であるとみて、本稿ではナイ・ン・ヘン・ヤン等を、ひとしなみに否定辞と呼んでおく。
- 2) 実際には62名以外にも調査しているが、大阪および奈良の話者のみを選ぶと62名となった。
- 3) 2011年春学期の月曜授業の最終日（7月18日（月））に、1限（専修基礎演習：2年次生対象）と4限（演習：3・4年次生対象）の受講生に協力を

大阪・奈良の方言における否定辞について

依頼した。

- 4) 山本俊治 (1962) では、大阪府の方言を能勢方言、三島方言、摂津方言、北・中河内方言、南河内方言、泉北方言、泉南方言に分類している。
- 5) 調査票のフェイス項目で小学校入学時以降の在住歴を尋ねた。小学校・中学校在籍時を言語形成期と見なし、転居歴を記入した回答者については、小・中学校時に長く住んでいた場所の話者として扱った。ただし本調査において、転居歴のある回答者はごく少数であり、なかでも他府県への転居歴のある回答者は若年層に1名(兵庫県→大阪府)、中高年層に3名いたのみであった(大阪府→奈良県が2名、奈良県→大阪府が1名)。
- 6) 郡 (1997) ではヘン否定と比べて「ン否定はだんだん使わなくなってきている」とある。岸江 (2004) では「カカンといった言い切り形は現在の大阪弁ではほとんど聞かれなくなり、カカヘンの方を多くの場面で専用するようになってきている。(中略) 近畿中央では「ん」が衰退し、「へん」が優位に経っているということができよう」とあり、岸江 (2005) にも同様の記述がある。
- 7) このことは鳥谷・岸江 (2014) でも述べられており、「従来優勢であった、否定辞の「～へん」から「～ん」に変化し始めているようである」と述べられている。
- 8) 一段動詞の五段化が起きた形のミラン (見ない) とミヤン (見ない) との関係については、機会を改めて考えたい。その際には、楳垣実 (1936) ・矢野文博 (1956) ・日高水穂 (1994) 等を参考に検討する必要があるだろう。

参 考 文 献

- 楳垣実 (1936) 「「へん」と「やん」——和歌山方言の否定の助動詞——」『国語研究』4-7
- 鎗木昌博 (1995) 「大阪府大阪市都心部方言の否定の表現」『方言資料叢刊』5
- 岸江信介 (2004) 「大阪弁の中の多様性——大阪弁の地域差と世代差をめぐって——」『日本語学』23-11
- 岸江信介 (2005) 「近畿周辺圏にみられる方言の打消表現」『日本語学』24-14
- 岸江信介・中井精一 (1999) 『大阪～和歌山間方言グロットグラム』摂河泉地域史研究会調査報告言語社会研究部会報告1
- 岸江信介・中井精一・鳥谷善史 (2001) 『大阪府言語地図』近畿方言研究会

- 郡史郎（1997）「大阪方言の特色」『大阪府のことば』明治書院
- 国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図』第2集
- 摂河泉地域史研究会（1994）「泉南市山間部言語調査報告」泉南市教育委員会
- 高木千恵（2004）「若年層関西方言の否定辞に見る言語変化のタイプ」『日本語科学』16
- 鳥谷善史・岸江信介（2014）「関西若年層の否定辞「～ヤン」の使用拡大とその要因について」『第98回日本方言研究会研究発表会発表原稿集』（2014年5月16日 於早稲田大学）
- 日高水穂（1994）「近畿地方の動詞の否定形」『方言文法1——『方言文法全国地図』分析——』GAJ研究会
- 日高水穂（2013）「俯瞰する方言研究」阪大日本語学研究会配布資料（2013年9月14日 於大阪大学）
- 前田勇（1955）「大阪方言における動詞打消法」『東條操先生古稀祝賀論文集』近畿方言研究会編
- 矢野文博（1956）「打消の助動詞の一系譜——ヤンについて——」『三重大学学芸学部研究紀要』16
- 山本俊治（1962）「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 山本俊治（1981）「「ン」・「ヘン」をめぐる——大阪方言における否定法——」『方言学論叢Ⅰ 方言研究の推進』三省堂

大阪・奈良の方言における否定辞について

以下に、調査票の一部（今回の分析に係る部分）を載せる。最初の依頼の挨拶文、フェイスシート項目（名前、生年月、性別、職業、在住歴、父・母・配偶者の出身地）、待遇表現項目、言語意識項目の文言については、ここでは省略する。

関西方言／調査票

調査日時 2011年__月__日

開始時間 午前・午後__時__分

ふだん、家族や友達などの最も心おきなく話せる相手と話すときのことばについて教えて下さい。当てはまる選択肢に丸をつけるか、「その他」のカッコの中にお書き込み下さい。（使いそうなものが2つ以上ある場合は全てに丸をつけて、一番よく使いそうなものに二重丸をつけて下さると有り難いです。）

1 否定表現

(1) 「今日は仕事に行くか」と聞かれて、「行かないよ」と答える場合、「行かない」の部分をどのように言いますか。

a イカン b イカヘン c イケヘン d その他 ()

(2) 「今日、仕事に行くことができるか」と聞かれて、「行くことができないよ」と答える場合、「行くことができない」の部分をどのように言いますか。

a イケン b イケヘン c イケーヘン d イケレン

e イカレヘン f イケレヘン g イケヤン

h その他 ()

(3) 「昨日は仕事に行ったか」と聞かれて、「行かなかったよ」と言うとき、「行かなかった」の部分をどのように言いますか。

a イカナンダ b イカンカッタ c イカヘンダ

人間文化研究 創刊号

- d イカヘンカッタ e イケヘンカッタ f イカヘナンダ
g その他 ()

(4) 「昨日は都合が悪くて、仕事に行くことができなかつたよ」と言うとき、「行くことができなかつた」の部分をもどのように言いますか。

- a イケナンダ b イケンカッタ c イケヘンカッタ
d イカレヘンカッタ e イケレンカッタ f イケレヘンカッタ
g イケヤンカッタ h その他 ()

(5) 「今日、この服、着るか?」と聞かれて「いや、着ないよ」と答えるとき、「着ない」の部分をもどのように言いますか。

- a キン b キーヘン c キーヒン d キエヘン
e キヤヘン f キヤン g その他 ()

(6) 「暑いから上着を着なくてもいいだろう」と言うとき、「着なくても」の部分をもどのように言いますか。

- a キンデモ b キヤンデモ c キヤヘンデモ d キンカテ
e キーヘンデモ f その他 ()

(7) 「この服、古くてだいたいたんできたから、もう着ないでおこう」と言うとき、「着ないでおこう」の部分をもどのように言いますか。

- a キントコ b キヤントコ c キヤヘントコ
d その他 ()

(8) 「この服、小さくなってしまったからもう着ることができないよ」と言うとき、「着ることができない」の部分をもどのように言いますか。

- a キラレヘン b キラレン c キレヘン d キレーヘン
e キラレヤン f キレヤン g キレン h その他 ()

(9) 「明日はこのスーツを着なければならぬ」と言うとき、「着なければならぬ」の部分をも何と言いますか。

大阪・奈良の方言における否定辞について

- a キナアカン b キヤナアカン c キンナアカン
d キンナラン e その他（ ）

(略)

これで終わりです。ご協力くださり、どうもありがとうございました。

終了時間 午前・午後_____時_____分 所要時間_____分

**Changes in the Use of Negative Suffixes
in the Osaka and Nara Dialects:
An Analysis Focused
on Generation Differences**

MURANAKA Toshiko

I carried out an investigation into the use of negation expressions by speakers of the Osaka and Nara dialects. In this paper I report the results of the investigation.

It has generally been thought that the negative suffix *HEN* (e.g., *IKAHEN*: I do not go) is more frequently used than another negative suffix, *N* (e.g., *IKAN*: I do not go) in standard negation sentences in modern Osaka dialect. However, I was able to confirm that the use of *N* has increased among young people in the past few years. *IKAN* has increased together with its past form *IKANKATTA* (I did not go), and *IKEN* (I cannot go) with its past form *IKENKATTA* (I was unable to go). This suggests that both the present and past forms change in conjunction with each other.

In addition, it was found that the negative suffix *YAN*, which had previously not been used very much in Osaka, has come to be used more frequently in recent years.

Negative suffixes can not only be located at the end of a sentence to create a negation, but can also be buried in the middle of a sentence and used to make expressions of supposition, will, or duty. By investigating them together, I was able to clarify the actual situation of negation expressions and the reasons for the change in the use of negative suffixes.

It is suggested that supposition expressions (*-YANDEMO*) and will expressions (*-YANTOKO*) were related to the appearance of *YAN* in a nega-

大阪・奈良の方言における否定辞について

tion sentence, but duty expressions (–*YANA AKAN*) were not. Moreover, statistical analysis of the use of *YAN* in each dialect area showed that the change was most pronounced in the Senboku and Minami Kawachi dialect areas.